

看護師長退職によせて



退職にあたり

看護部 村山昌子

新年を迎えた折、先生方への挨拶時、「あと3ヶ月ですね」と多くの方に声をかけていただきました。前年度ギリギリまで様々なことに追われていた私は、退職について見て見ぬふりをしていたのか、考えないようにしていたのか、この時、初めてこの言葉が胸の中に入り込んできました。

私が歯学部附属病院の玄関を最初に訪れたのは36年以上も前の事です。年度途中の採用でしたので応募者は4名でしたが、無事難関？突破することができました。一般外科の勤務経験のあった私は、口腔外科病棟に配属され、同じ外科系であると言う安堵感を持ちました。しかし、働き始め、最初に悩まされたのは新湊弁でした。「しょしらてー」も「ながまりたい」も「びちゃれ」もわかりません。とてつもない洗礼を受けた気分でした。大分発、東京経由新湊着でしたので、触れたことのない言葉に患者さんの訴えが聞き取れず四苦八苦した事を覚えています。また、先生から「クレンザー」と言われ、思わず流し場へ走ったり、「ブローチ」と言われては胸元を見たり、「ポケット洗うよ」と言われてもどのポケットが分からず右往左往した記憶もよみがえります。歯学部附属病院の開設当初からいらした先輩方や当時の同僚も、気が付いたら殆どがいなくなり、時の流れの速さに驚くばかりです。

看護師長の職務を頂きましたのは平成9年の事です。当時は看護部長も在籍し、看護師長が8人もいました。新任師長としてのスタートは病棟でしたが現在のようにクラークもMSWもいません。全ての調整に目まぐるしい1日ながらも充実した毎日を送っておりました。病棟では、2交替夜勤の体制づくりに取り組みました。WGを立ち上げ、勤務時間の検討からの始まり、16時間夜勤の試行を開始しました。当初は実施している病院

も少なく、文献を集めての情報収集が大半で、顔には出せませんが大きな不安はぬぐえませんでした。定期的なアンケートと疲労度調査を行い、対策を立てながら1年間の試行後に本実施となりました。最初はスタッフ全員が反対していましたが、1年後には3交替夜勤に戻りたいと言うスタッフは1人もなくWGメンバーで大喜びしたことを思い出します。長時間勤務の疲労はあっても夜間の出入りのない勤務は看護師の労働環境を変えた大きなシステムでした。

その後、歯の診療室・歯周病診療室・加齢歯科診療室の担当になりました。この当時、感染管理に対する大きな変革があり、中央化に向けた洗浄方法の再検討、ワッテ缶の廃止、アルコール綿の単包化、薬瓶の中央化と目まぐるしい変化を遂げました。先生方の仕事やし易い環境を第一に考えてきたものが感染管理一色に染って見えました。様々なご意見は頂きましたが、この状況を理解し、協力していただきました先生方に心から感謝しております。この頃は、看護師長でありながらも実践業務も行っていましたので、大好きな現場での仕事の楽しさを存分に味わっていた頃でした。

独立行政法人化に伴い、医学部と歯学部の統合が行われたのは平成15年10月1日の事です。

ここからは私にとって激動の時代です。この時期には看護師長は4名となっていました。業務量調査の結果より、歯科外来は看護職でなくても良い業務内容が多いと判断し、他職種への転換計画が浮上してきました。検討の結果、平成17年18年と8名の看護師が削減となり、人員補充は歯科衛生士をと考え、他に外注業者の活用へと業務内容移行のための体制づくりに取り組みました。少ない看護師でレベルを落とさず看護が提供できる組

織づくりが必要であり、同時に、効率良い人員配置を行っていくことが必須であると考え、歯科外来システム再編に向けての活動を計画しました。他の師長や副師長の協力を得て流動性勤務体制を構築し、業務の統一を図り、個の自律を促し、現場で考え行動できる看護師の育成が必要となると、教育への取り組みも行いました。適正職種を選択と人材配置の検討は大きなコスト削減につながります。看護業務内容の見直しと効率よい人材活用を考えることは、質の向上と効率化を同時に目指す良き機会となりました。

平成22年には、看護師長は1名となってしまいました。大きな師長室に1人残された寂しさは忘れられません。看護師は14名、歯科衛生士は16名となり、平成22年11月に新外来棟への移転が決まり、さらに看護師数を削減（現8名）し、歯科衛生士を増員（現26名）するため、歯科衛生士への仕事の移乗を目的とした、1年計画での研修を行いました。当時の歯科衛生士の新人4名は「醜いアヒルの子」に出てくるアヒルの様に職種の違う看護師から1年間の指導を受けています。その4名も今は立派な白鳥たちです。

新外来棟移転3年前から管理運営検討委員会を通し、移転に向けた計画を作成しました。業務の効率化をめざし取り組みを行った物品管理は、これまで各科師長が同様に行っていた在庫管理・請求をやめ、在庫の中央化を目指した管理システムに変えることにしました。新外来棟の在庫スペースの狭小化と中央化が可能になる中央計画を開始し、同種同効品の洗い出しから始まり、先生方の協力のもと各科で100~1500程度の削減に成功しました。これで移転可能なアイテム数となりました。さらに移転1年前には4つのWGの立ち上

げをお願いし、看護スタッフはもちろん、先生方・歯科衛生士と共に準備を進めてまいりました。少なくなった看護スタッフで出来る仕事内容を検討し、歯科衛生士さん達に仕事を移乗する分、受付業務からは撤退し、専門職種でなくても良い業務を外注業者に委託できるように交渉していきました。看護師も口腔ケアや摂食嚥下訓練を行うことでコスト算定ができるようになりました。これにより、それぞれの専門職が専門業務へ専念できる環境が整ったと自負しています。引越は非常に大変な作業でしたが、すべての歯科外来スタッフが一丸となり、どこよりも協力体制の取れた診療科であったと思っています。

歯科一筋36年8か月、振り返ってみますと、いつの取り組み時にも、看護師・歯科衛生士スタッフの皆さんの協力、たくさんの先生方の協力がありました。掲げた内容に理解を示して頂き、私自身が動けて行けるように支えられてきたことを強く感じ、改めて幸せを噛みしめています。移転後の外来も良き状況で稼働しています。この状況を確認出来、去ってゆける事を喜びに想います。

退職後は、先ず「ゆっくり自分の時間を味わいたい」が一番正直な思いです。その後何に走っていくのか私自身も楽しみです。家の中で楽しむは無理そうです。昔からの夢だった退職後キャンピングカーでの旅三昧は、南志向の私と北志向の夫との間で諍いが生じた後の決行になりそうです。今後は、可愛い2人の孫育てをしながら、良き「バババチャン」を目指します。

長きにわたりお付き合いいただきました皆様、袖すりあった皆様へ心から感謝の意をお伝えし閉じさせていただきます。ありがとうございました。



大切なスタッフ達と共に



かわいい孫たちです

村山昌子師長の退職にあたって

新潟大学医歯学総合病院 歯科総括副病院長 高木 律 男

本年3月末にて新潟大学医歯学総合病院歯科外来看護師長の村山昌子殿が定年ということで退職になられます。歯科外来における多くのことをお任せしてきた心強い看護師長さんであり、まだまだ頼りにしているだけに非常に残念です。しかし、お元気で還暦を迎えられたというおめでたいことでもあり、これまでのお礼を込めておくり出したいと思います。

私と村山師長さんとの出会いは私が歯学部10期生として卒業した1980年になります。村山師長さんは、東京の病院で2年間ほどの看護婦生活の後、前年の10月から歯学部附属病院歯科病棟に正式任用されておられました。すなわち歯科臨床（医療）においては先輩にあたり、卒業したてで右も左もわからない私に、厳しくも優しく？病棟における患者さんの看護についてご指導を受けた記憶があります。以後ずっと歯学部附属病院において勤務されており、経歴を見せていただくと、昭和57年10月～保存科外来、昭和60年10月～矯正科外来、昭和62年5月～滅菌材料室、平成2年10月～中央手術室（ここから副婦長に就任）、平成3年10月～口腔外科・麻酔科外来および手術室を兼任、平成6年4月～歯学部附属病院病室、平成9年4月～看護婦長に就任、平成11年4月～保存科外来、平成14年3月～看護婦長→看護師長（保健婦助産婦看護婦法の一部を改正する法律のため）、平成15年10月～新潟大学医歯学総合病院看護部看護師長に配置換えとなり、以後歯科外来師

長ということで新外来棟の4階、5階を総括していただきました。このように、歯学部附属病院から医歯学総合病院歯科に至るまで長きにわたり、多くの部署で多くの歯科医師・看護師・衛生士に対して多くの指導をしてくださったことに感謝の気持ちは筆舌に尽くせません。

さらに、歯科全体への貢献として医療の基本となる医療安全、感染対策の面でも多いにお世話になりました。私も同様の仕事に関係していたことから、歯学部附属病院医療安全相互チェック（隔年）（広島大、鹿児島大、大阪歯科大）、毎年1回の国立大学附属病院感染対策協議会、同関東甲信越ブロック会議、などへの出張でご一緒させていただきました。また、院内では歯科系PM連絡会議、歯科系院内感染対策検討作業部会（旧・院内感染対策歯科WG）などなど、いずれも歯科医療の根本をなす部分で、それらをまとめる歯科系病院運営検討委員会でも、かなり前から委員として参加し、歯科医師、歯科衛生士、クラーク、事務方すべてに対して配慮した形で対応していただきました。まるで病院功労賞の推薦文章の様になってしまいましたが、残念ながら退職される方は功労賞の対象とはならないとのことでした。

最後に、まだまだお若いとはいえ体調管理を大切に、今後も新潟大学医歯学総合病院歯科への叱咤激励をお願いして、お祝いの言葉とさせていただきます。長い間ありがとうございました。

村山昌子師長の御定年退職によせて

外来4・5階看護師 遠藤千佳

2011年3月から歯科外来に勤務している看護師の遠藤です。村山師長の御定年退職に寄せての原稿を依頼され、あらためて振り返ってみたところ、出会ってから20年以上経っていたことに気づきました。私が初めて村山師長にお会いしたのが、まだ医科と歯科の病院が合併する前の歯学部附属病院だったころにさかのぼります。歯科病棟に勤めたころ師長は手術室勤務だったと記憶しています。初めは部署が違うこともあり手術の送りお迎えの時に会う程度であまり話す機会もありませんでした。その後、歯科病棟で一緒に働くようになってからは、明るく楽しくて、リーダーシップ力もあって、今まで私の周りにはいないタイプの方だなと思いましたが、後で九州出身と聞いて九州の人は新潟の人とは違うんだなと変に感心したものでした。その後村山師長さんは歯科外来移動し、私は歯科病棟が医科の東病棟に移転した際に移動したため、勤務場所がかなり離れてしまい、会う機会がほとんどなくなってしまいました。もう一緒に働く機会はないであろうと思っていたのですが、2011年1月に看護部から歯科外来へ移動し、歯科外来の移転が控えているため村山師長の手助けをしてほしいと伝えられ、そして3月に歯科外来に移動してきました。移動して見たものは細かく立案された移転作業のスケジュールと、毎日、会議をいくつも掛け持ち、帰りも遅く、外来移転という一大イベントに全力投球している

師長の姿でした。今まではそれぞれの診療科で運営していた外来を歯科外来として一つにまとめることは並大抵のことではなかったと思います。そして新外来棟に必要な備品、備品の配置、人の導線、物流、清掃業者など感染と環境を視点を検討し、そのことを歯科医師、事務、そして関連部署と調整を行い、まとめていく様子を間近で見ていて、師長のマネジメント能力とリーダーシップ力のすごさに感心するとともに、体を壊さないか心配でなりません。すごく忙しいさなかスタッフにはその忙しさをできるだけ見せないようにして、仕事で相談に行っても手を止めて話を聞き適切なアドバイスをしてくれました。本当に頭が下がる思いでした。移転が無事終了し外来診療が開始になっても、大きなトラブルなく診療ができ、備品等不足がなかったことは、師長の努力の成果だと思っています。実は移転が終わったら燃え尽きて仕事を辞めてしまうのではないかとひそかに危惧していましたが定年を迎える最後まで歯科外来のために力を尽くしてくれてとても感謝しています。

最後に、村山師長の御定年を迎えるにあたり、今まで歯科で長く頑張ってくれたことに感謝とお疲れさまを伝えたいと思います。本当にありがとうございました。これからは少しペースダウンし、お孫さんの育児を楽しんでください。